

編集後記

本号の2つの特集を統計家の立場から大変感慨深く読んだ。

相関、回帰概念の創始者 F. Galton が、統計的科学的な「大規模な関連する事実の集合情報を、議論に適した簡潔な表現に集約する方法を発見すること」を目的として構築すべきだとしたのは1883年である。その意を受けた数学者・法学者・ドイツ文学者 K. Pearson は、1891年「科学の文法」をロンドン市民に公開講義し、科学はその対象ではなく、それを生み出す方法で特徴付けられ、ありとあらゆる対象が科学たり得ることを宣言した。彼は、この講義の中で、「ヒストグラム」や「標準偏差」という言葉を発明し、科学を作る方法論の体系化に熱中し、特殊相対論構築を目前に(?) 1893年から不幸にも統計家に転向し、相関係数、分割表検定の開発に明け暮れる。実際、Einstein は、Pearson の文法をしっかりと読んでいて、Pearson の科学を「観察または実験から得る心象であるデータを分析し、抽象化し、これを総合して一般化し、必要に応じて分類することで法則ができる。こうして科学はできる。科学が、現象を分類し、一般化して法則を推論するのは、過去から未来を予測するとか、法則を、経験外の分野にも適用できれば手数が省けるといった実際の便宜のためである。また、科学は合理的想像としての仮説を許容する。昔から発明家は皆想像から、何らかの示唆を得、それから此れを検証する。検証は難しくても、仮説が成り立つ確率が高ければ、この仮説に基づく法則は、その確率に比例して有用といえる。」と要約しているのが、ロンドン留学時代の漱石のノートである。漱石は、文藝を科学にする10年計画を立てたが不幸にも実践家に転向し、わが国では Pearson 流の科学は、弟子の寺田寅彦に受け継がれたものの(?) 大戦後まで閑却される。アメリカでは Shewhart が、工業生産を仮説検証型手続きで、やはり科学にできると考え、今日の PDCA サイクルの原型を生み出す。これが、クオリティマネジメントの始まりである。

わが臨床評価誌には、権威主義的思考を排し、臨床の現場の知識を基に議論する良き伝統がある。その知恵を臨床評価学に昇華させるヒントの全てが本特集にある。

なお、拙文の中で(?) マークが付されているのは、主観確率70%で成立する仮説部分であるが、後記に示す仮説としては有用と考えるので、ご容赦願いたい。

(椿 広計)